

## 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ（XI）

——宝幢院本地蔵十王図，老いの坂・両婦地獄・釘念仏のルーツ——

宮 川 充 司\*

The Kumano-Kanjin Jikkai Mandala and Its Roots (XI):  
Roots of Figure Parts of Oinosaka (Life Stages), Futamejigoku (Both Women Hell), and  
Kuginenbutu (Buddhist Chant for Nail Pulling) through Hodoin's Versions of  
Jizo-Juo (Guardian Deity and Ten Magistrates in Underworld)

Juji MIYAKAWA

熊野観心十界曼荼羅に関する研究は萩原（1983）に始まり，小栗栖（2004）から小栗栖（2011）に至り研究体系が完成の域に達したといっても過言ではない。小栗栖（2011）は，その大著『熊野観心十界曼荼羅』において，熊野観心十界曼荼羅の分類や展開，その画像形成に影響を与えたと思われる絵画の流れ，あるいは熊野観心十界曼荼羅が影響を与えた後代の絵画，その関連史料等，体系的な論考を加えている。

集積した研究の全体像を通して見えてくるのは，熊野観心十界曼荼羅が，聖衆来迎寺本六道絵・承久本北野天神縁起絵に始まる地獄絵・六道絵の系譜，平安末から鎌倉時代・室町時代に架けて招来された宋元画の十王図や水陸絵，その十王図と六道絵が融合して作成された六道十王図といった，日本絵画史における六道絵・地獄絵の潮流の集大成として完成されていったものではないかという捉え方である。熊野観心十界曼荼羅の構成に影響を与えた先行絵画（ルーツ）は単一の絵画ではなく，部分ごとにさまざまな先行絵画があり，複数のルーツをもった日本の地獄絵・六道絵の集大成と考えるのが合理的な捉え方ではないだろうか。これは，研究が大きく展開される以前の段階で根井（2003a, 2003b）や宮川（2005）が仮説的に論じたことでもあった。

萩原（1983）は，宋の遵式の「天竺別集」に記載のある「円頓観心十法界図」，チベットの「生死輪図」，西洋の「人生階段図」と熊野観心十界曼荼羅との類似性を指摘した。熊野観心十界曼荼羅の中心「心字」から，仏菩薩縁覚声聞の四聖界と天人餓鬼畜生修羅地獄の六道を合わせた十界が放射状の線で結ばれている基本構造は，「円頓観心十法界図」に依っているのではないか。あるいは，西山（2003）による別のルーツ説，すなわち豊臣秀吉による文禄・慶長の役（1592-1593年，1597-1598年）に戦利品として持ち込まれた「甘露幀」ではないかといった，単一ルーツの推定は，定型本の発展過程においてもさま

---

\* 教育学部 子ども発達学科

ざまな起源の構成要素を取り込んできた熊野観心十界曼荼羅の展開に合致しないのではないだろうか。例えば、宮川（2008）は、定型本甲系統Ⅰ形式（興善寺本・日本民藝館本）の産屋の不思議な産湯の場面、すなわち白衣の女性が自分の両足を産盥に入れ、その状態で赤子を産湯に浸けようとしている場面は、江戸初期に普及した産婆の図と共通する産湯の様式であり、そこに登場する女性は母親ではなく産婆である。また、この画像は、別本六道珍皇寺甲本の産屋では、産婦と産婆を別個に描いているので、なお産婆による産湯の儀場面であることが明確であるという指摘をした。ただし、産婆の図の版本が普及したのは17世紀の終わり～18世紀の初めで、産婆の図に別の底本があったかどうかは定かでない。逆に、熊野観心十界曼荼羅の初期のものが、産婆の図の底本となったという可能性も否定できないとした。また、宮川（2013）は、近年発見された熊野観心十界曼荼羅別本とされた、長命寺穀屋寺甲本熊野観心十界曼荼羅にも、定型本甲系統Ⅰ形式や六道珍皇寺甲本の産屋場面と共通した図像となっているということを指摘している。同じく、宮川（2009）は、熊野観心十界曼荼羅の「子は三界の首枷」部分は、宋元画の十王図にルーツのある、墮胎された子どもが訴状をもって自分の母親につきまとっている図像であり、それが甲系統Ⅳ形式（小栗栖の新分類ではⅤ形式）から閻魔大王が図像として取り込まれる際に一緒に登場したが、定型本乙系統に発展していく段階で独立した図像として扱われるようになっていったということを指摘した。こうした知見の集積は、熊野観心十界曼荼羅のルーツは、単一ルーツから発展していったという単一ルーツ説より、定型本の発展過程に沿って、多様な異なる図像を構成部分に取り込んでいったとする、複数ルーツ説を支持し、事実関係に合致しているといえる。

小栗栖（2011）は、熊野観心十界曼荼羅の絵画的なルーツの一つともされていた禅林寺本十王図（室町時代16世紀の製作とされ箱書きには「十界之図」とあるが、餓鬼道と修羅道が描かれていない）と、新発見の長命寺穀屋寺本熊野観心十界曼荼羅甲本（江戸初期に製作されたと推定される別本）とは、賽の河原・三途の川と奈河橋・奪衣婆・地獄の釜・血の池地獄部分の細部描画様式が、同一工房で製作されたのではないかと推定できる程酷似していると指摘している。これは、依然として謎のままである初期の熊野観心十界曼荼羅の製作の製作工房について、一条の光を当てた分析ともいえる指摘である。

### 東京国立博物館本おいのさか図

萩原（1983）は、熊野観心十界曼荼羅の重要な構成要素である「老いの坂」部分について、東京国立博物館本「おいのさか図」を底本としているのではないかとすることを論じた。おいのさか図は、鎌倉時代末から室町時代初期（14～15世紀）に製作された、人の一生のイメージを描いた絵画であるが、単独の絵画として老いの坂を描いた唯一の作例である。このおいのさか図は、宮川（2005）にモノクロ写真、東京国立博物館（2001）・小栗栖（2011）にカラー写真が掲載されている。

おいのさか図の上約2/3に老いの坂が描かれ、すやり霞で仕切られた下1/3に平入りの館と子どもの姿が描かれている。老いの坂部分には、右側から順に山に登って降りるという様式で、9人の男性が描かれ、その周りを四季の樹木が取り囲んでいる。萩原によると、右下最初に描かれる人物について、水干を着た童子を10歳と比定し、以後10歳ごとに一

人の人物が描かれている。次が狩衣を着た20歳、30歳、40歳、山の頂上が50歳、下って60歳、剃髪の場面で描かれるのが70歳、杖をつく80歳、最期が90歳となる。

このおいのさか図については、宮川（2005）で付帯史料を含めて考察した。狩野洞雲による「土佐筆 おいのさか図」という極め札が、箱表に貼り付けてある外、伝来は不明であるが、絵の描かれた14～15世紀では、80歳・90歳となるときわめて希な長生きとなるが、絵画の描かれた目的が高齢の貴人の長寿祝いのためだと推定すると、最期の人物の背景樹木が常磐の松であることが十分理解できるのではないかと推定する。このおいのさか図と熊野観心十界曼荼羅の老いの坂部分と異なるのは、男女ペアで描かれていないこと、人生の最後の場面として死（墓地）の場面が描かれておらず、その代わりに常磐の松を背景にする僧体の男性で終わっているという点である。この描き方が、長寿の祝いのために描かれたと推定する根拠となっている。老いの坂を巡る樹木は、人の一生を春夏秋冬と四季のイメージで描かれ、梅・桜・若葉・松・紅葉・枯れ木、最後に常磐の松で終える。定型本熊野観心十界曼荼羅では、梅・若柳・桜・松・杉・紅葉・黄葉・枯れ木の順に描かれる。ただし、定型本でも一番古い形式である甲系統Ⅰ形式の興善寺本や日本民芸館本では、若柳ではなく若芽の木として描かれる。同じく初期の別本と位置づけられる長命寺穀屋寺甲本と六道珍皇寺甲本ともに若柳が描かれていない（宮川、2007、2013）のは、偶然の一致ではないだろう。

東京国立博物館本おいのさか図のすやり霞で仕切られている下1/3部分で、すぐ下に描かれる平入りの館には、公家装束の男女と、縁側に赤衣着物を着た赤子が、鞠とじゃれる犬（または猫）の紐を引っ張って遊んでいる姿が描かれている。館の庭には、竹馬（ただし中世の竹馬は、竹を切り出し、それをそのまま馬に見立てた遊びで、現在の竹馬は高足と言う別名称で呼ばれていた）で遊ぶ子ども、弓を射る子どもが描かれている。赤衣着物を着た赤子を、産湯の赤子に置き換えると、興善寺本や長命寺穀屋寺甲本と六道珍皇寺甲本の産屋とも、この館の描き方に酷似している。老いの坂部分だけでなく、この平入りの館部分を含めて、熊野観心十界曼荼羅の産屋の図像的ルーツと考えるのは、ごく自然な捉え方ではないだろうか。

ただし、14～15世紀頃制作された世俗画おいのさか図が、17世紀初頭の制作と推定される熊野観心十界曼荼羅定型本の老いの坂部分に影響を与えたとするには、製作年代が離れすぎている上、その年代的ギャップを埋める史料があまりに乏しいものであった。

### 総持寺本六道十王図

その年代的ギャップ及び世俗画と宗教画のギャップを埋める作例として、鷹巣（2000）は、室町時代（16世紀）制作の総持寺本六道十王図を挙げている。

総持寺本六道十王図を所蔵する梶取本山総持寺は、和歌山市にある浄土宗西山派の古刹で、ここに十王図の内、閻魔王幅・都市王幅・五道転輪王幅の3幅のみが現存している。鷹巣によると、この総持寺本六道十王図は、元末から明時代（14世紀）に制作されたと推定される静嘉堂文庫本十王図12幅を底本としているのではないかと。12幅というのは、十王図10幅に監齋使者図・直府使者図の2幅で一具をなしている。総持寺本六道十王図の現存3幅には、それぞれ十王のどの王であるか、画中の短冊に名称が記されてい

いが、絵の上約3/4が静嘉堂文庫本十王図を忠実に模写し、閻魔王幅・都市王幅・五道転輪王幅と画像が重複しているために、十王の名称が特定されているものである。閻魔王幅には、左上にあった飛来する地藏菩薩を、閻魔王の上部に移動させている。都市王幅・五道転輪王幅の上部に、静嘉堂文庫本十王図にない本地仏が増補されている。都市王幅の本地仏は勢至菩薩が、増補されている。五道転輪王幅には、本地仏が描かれていないが、初めから描かれていないのか、剥落したのか判断できない。また、下約1/4部分にL字型あるいは逆L字型に上部に食い込む形で、原本にない六道図部分を増補している。

図1に総持寺本六道十王図から、五道転輪王幅と都市王幅を示す。閻魔王幅は、今回紙面の関係で割愛するが、カラー写真が富山県〔立山博物館〕(2001)及び小栗栖(2011)に掲載されているので、そちらを参照のこと。法量は富山県〔立山博物館〕(2001)によっている。なお、閻魔王幅の下1/4には、地獄の火車と餓鬼道が増補されている。

五道転輪王幅の下1/4には、右に燃えさかる劫火に亡者が転落していく阿鼻地獄と、左に老いの坂が描かれる。その老いの坂部分を拡大した図を、五道転輪王幅の直下に掲載する。老いの坂部分の右下に、赤い着物を着て髪を束ねている子どもが描かれる。年齢は不詳であるが、袴を着していないので袴着(数えの5歳)前の子どもの描いていると考えてよいだろう。二人目の人物は、狩衣で冠を被っているのが元服(加冠)後の男性である。仮に東京国立博物館本おいのさか図についての萩原(1983)による年齢推定から、二人目の人物を20歳とすると、後は順番に30歳、40歳、頂点が50歳、下って60歳、70歳、80歳が杖をつき僧形の人物、その次が死を意味する白骨体で描かれる。この最後の死が描かれていることと、周囲の四季の樹木が描かれていないのが、東京国立博物館本おいのさか図との大きな違いである。勿論、下1/3にあった平入りの館も、遊ぶ子どもの姿は描かれていない。

鷹巣によると、都市王幅には、左中央に両婦地獄、下1/4に黒縄地獄が増補されている。両婦地獄は、二匹の蛇にまとりつかれた男性が描かれているが、両婦地獄に典型的な人面の蛇ではない。上側の黒い蛇には角が生えているが、下側の緑の蛇には角が生えていない。逆に言えば、人面ではないところから、この図像は両婦地獄の典型的な図像が確立する前の段階のものと考えられるのではないかと。これは、2005年1月10日に和歌山市立博物館に寄託されている総持寺本六道十王図の原本を、鷹巣 純氏のご案内で熟覧した折、鷹巣(2000)に記述のあるこの部分の教示を受けている。

### 宝幢院本地蔵十王図

小栗栖(2011)は、総持寺本六道十王図のうち五道転輪王幅と同様に、老いの坂部分が描かれている絵画史料として、室町時代後期(16世紀)の制作と推定できる六道十王図を取り上げている。製作年代については、滋賀県立安土城考古博物館(2010)では、中世から近世初頭と幅を持たせ、桃山時代と推定している。それは、滋賀県高島市にある古刹真言宗智山派宝幢院薬師寺が所蔵する地藏十王図21幅のことである。この地藏十王図は、小栗栖健治氏が2010年11月7日この寺院に調査に出向かれた折に同行し撮影をさせていただいた。制作年代は明らかではないが、室町後期に用いられた典型的な室町絹に描かれたものであると、桃山時代というよりもう少し年代の古い室町後期(16世紀)制作と





五道転輪王幅



都市王幅



老いの坂部分 (左下)



両婦地獄部分 (左中央)

図1 総持寺本六道十王図 五道転輪王幅と都市王幅 158.0×75.0  
画像提供 富山県 [立山博物館]

推定することができるのではないだろうか。21幅の法量は、小栗栖氏の測定したものを転用すると、92.9×38.7cmとこの種の絵画としてはやや小ぶりのものである。ただし、21幅完本というところが貴重なところである。この21幅全部の画像は、滋賀県立安土城考古博物館（2010）の企画展「湖西の風土と遺宝—高島郡を中心に—」の図録にモノクロ写真（一部カラー写真）、小栗栖（2011）に全カラー写真が収録されている。秦広王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・変成王・泰山王・平等王・都市王・五道転輪王の十王、地藏菩薩（地藏三尊）が各幅に描かれる。十王には、本地仏が画像としては描かれないが、左上の短冊に文字として十王名に併記されている。他の10幅は名称が定かでないが、説明のための小栗栖（2011）の掲載順に一部仮の名称を付けると、誓願船幅、天道幅、都卒中院摩尼寶殿幅、人道第一幅、人道第二幅、人道第三幅、脱衣婆幅、三途川幅、地獄幅、五道幅のような各幅の名称を与えることができるのではないだろうか。十王幅以外の各幅の名称については、六道十王図の専門家に検討いただくこととして、この地藏十王図はとりわけ地獄についての図像が豊かである。十王図の各幅は、上半分に十王、下半分に様々な地獄の図像を描いている。豊富な文字の書き込みもある一方、他に類例を見ないようなユニークな図像も多く、すべての構成図像の解説にはもう少し時間を要するだろう。

さて、まず図2に、当該の老いの坂部分の含まれている人道第三幅と、釘念仏図の含まれる泰山王幅の部分を示す。

人道第三幅と仮に名付けた第十七幅には、上部約2/5に老いの坂部分が含まれている。この老いの坂部分には、画中に文字による書き込みがあり、左下の髪の毛のない子どもが3歳、次が10歳、20歳、30歳（山の頂上）、下って40歳、50歳、（60歳）、（70歳）、80歳が五輪塔の墓地となっている。60歳と70歳について（ ）で表記したのは、その文字表記が確認できないためである。おそらく書かれていた部分が欠損あるいは剥落して読めない状態となっているためではないか。他に、10歳の子どもの竹の右側に「発心」、20歳の笛を吹く男性の「修行」、30歳の狩衣の男性の背景には松が描かれ、図上に「主」という文字が書かれている。40歳の僧形（作務衣と思われる）の男性の紅葉の左に「□提」と書き込みがあるが、うっすらと痕跡が残るのみで判読できない文字は「菩提」であることが推定できる。80歳の墓地の場面左に行脚僧と書き込まれているが、これはこの墓に供養に訪れた旅の僧という描き方だろう。また、「発心」「修行」「菩提」の文字が順番に書き込まれていたとすると、最後の墓地の五輪塔の近くに「涅槃」の2文字が書き込まれていたと推定するのが自然であるが、デジタル画像の分析では、その2文字の痕跡箇所を特定するのが困難である。

また、老いの坂部分は、坂の周辺に四季を表す樹木が描かれている。10歳部分に竹、次は20歳手前に墨跡だけの不明の樹木（おそらく若柳か、桜か広葉樹の若葉であったが彩色分が剥落）、頂上30歳で松、40歳に紅葉、50歳と60歳の間に雪の積もった冬枯れの樹木と、東京国立博物館本「おいのさか図」や熊野観心十界曼荼羅に近い、人の一生を四季に例える樹木表現が使われていたと見られる。

人道第三幅の中央約2/5部分には、砦の場面が描かれ「自縄自縛」「狂人」といった文字が書き込まれている。下1/5は狩りの場面として描かれ、「自殺生者」と書き込まれている。

次に第七幅泰山王幅の分析に移る。左上の貼り紙に、「七七日 泰山王 薬師尊」と記



熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (XI)



人道第三幅



泰山王幅



老いの坂部分 (上部)



餅釘獄と蛇心欲生者部分 (中央下)

図2 宝幢院本地蔵十王図人道第三幅と泰山王幅 92.9×38.7

され、上半分に泰山王が描かれている。泰山王の左に描かれる人物に「文殊」と記されている。泰山王の机の左とその下に描かれる6人の人物には、右側に3人の僧侶が描かれ「出家可承意」「飯餞恭」と記され、中央の大きな人物には「弥勒」、その左側に僧、その直下に弓を中央に向かって引く人物に「大日」と記されている。他の諸幅でも同様の仏名が書き込まれているが、この「弥勒」「大日」といった仏名は絵画の中でどのような位置づけを持ったものなのかは、解説ができていない。

泰山王幅下1/2部分の分析に移る。中央に、まず蛇の後部にはしっぽで絡められている男性があり、その蛇の頭では口から炎を出し、黒焦げになりかかった人物が逃げ回っている。まるで道場寺縁起絵巻から抜け出したような図像には、「蛇心欲生者」と記されている。その下には、「餅釘獄」と記され、左側では板の上の男に釘を打っている鬼の画像があり、その右側には「清鬼王 文殊」と記された鬼が、ユーモラスに五重ねの餅に釘を打っている。「餅釘獄」という書き込みは、絵の制作された時代には「餅釘（地）獄」という名称で呼ばれていたことを示すものだろう。熊野観心十界曼荼羅の釘念仏部分のルーツと考えられる図像である。熊野観心十界曼荼羅の釘念仏図像の場合、餅は49個の四十九日餅であり、死後49日の間生前の罪のために身体の関節に一本ずつ打たれた釘が、追善供養の念仏の力により抜け、その釘が四十九日餅を針山に見立てて刺されていく場面である。それを四十九日餅ならぬ五重（十）餅に、清鬼王という鬼が釘を金槌で打っている場面なので、言葉のしゃれも含めてなんともユーモラスな情景ではないだろうか。その五重餅のすぐ上に、二人の人物の顔が描かれ「三悦閑宗心」（快楽が宗教心を鈍らせる）、「同子」と文字が書き込まれている。熊野観心十界曼荼羅に先行する絵画として、釘念仏を描いたものは乏しく、この泰山王幅部分を除けば、奈良国立博物館本「矢田地蔵毎月日記絵」のみが知られていた。

その絵巻物は、梅津次郎編（1980）の新修日本絵巻物全集第29巻『地蔵菩薩霊験記繪・矢田地蔵縁起繪・星光寺縁起繪』にモノクロ写真が掲載されている他、釘念仏部分のカラー写真は、鷹巣（2012）に掲載されている。また、他の「矢田地蔵毎月日記絵」諸本については、渡（2006）に詳しく紹介されている。奈良国立博物館本「矢田地蔵毎月日記絵」の十一月十九日「三万五千日にあたる むけんちこくのくまぬかる（無間地獄の苦遁がる）」の段に、「くきねんふつのゑんきなり（釘念仏の縁起なり）」という詞書きとともに、二匹の鬼が亡者の身体に釘を打ち付けている絵が描かれたものが知られている。なお、この十一月十九日の段には、室町時代後期に生まれたという両婦地獄や賽の河原の図像が、描かれていることでもよく知られている。ただし、この奈良国立博物館本「矢田地蔵毎月日記絵」の釘念仏の縁起部分には、男性亡者に釘を打っている鬼は描かれているが、餅は描かれていない。したがって、宝幢院本泰山王幅が、四十九日餅を伴う釘念仏の図像としては最古のものである可能性が高い。

泰山王幅では、餅釘地獄が特に独自性の高い図像であるが、強い怨念によって人が生きたまま蛇に変身するといった「蛇心欲生者」思想を示す図像が含まれていた。実は、宝幢院本地蔵十王図には、この思想がさらに両婦地獄に発展していく過程を描いていると解釈できる図像が、他の画幅にも含まれている。それは、第六幅の変成王幅と第九幅都市王幅である。この二幅の画像を図3に示す。

第六幅変成王幅の上1/2部分には、まず左上貼り紙には、「六七日 変成王 弥勒尊」と





変成王幅



都市王幅



繫念業 蛇念時鉢 二意者男女同 (左から)



他化獄 大蛇道 頸城愛 (左から)

図3 宝幢院本地蔵十王図変成王幅及び都市王幅 92.9 × 38.7

記されている。変成王図像の右側には、「古山」と記された僧、さらにその右側には「薬師」と記された冥官が描かれ、変成王の机の下には、三人の人物が描かれ、左から「普賢」、「清浄持律人」、「勢至」と記されている。下1/2には、左から九匹の蛇に変身した女性、六匹の蛇に変身した「蛇念時鉢」、二頭の頭を持つ蛇に変身した女性に二匹の蛇が纏わり付いた姿が描かれ、その右側に「二意者男女同」と記されている。次の段には、左から、二匹の蛇に巻き付かれて身動きできなくなっている人物が描かれ右側に「繫念業」と文字が書き込まれている。続いて、黒雲と馬に乗った神通童子、その右側に禪鬼と記された鬼が顔を出している。さらにその下の段には、「等活獄」と書き込まれた等活地獄の図像で、中央の箕を持った白鬼には普賢と文字が記され、白右側の杵を持った緑の青鬼には釈迦と記され、白右側の赤鬼には大日と記されている。

第九幅都市王幅の上1/2に移る。左上の貼り紙には、「一周忌 都市王 勢至尊」と記されている。右上隅には、瑞雲の船に乗った2人の僧が描かれ、その上に「人」という文字が読み取れるがその上部が失われているために、本来書かれていた文字は推定できない。都市王の右側に僧侶（おそらく複数の幅に登場する古山和尚）と「文殊（菩薩）」が描かれている。都市王の机の次には、左に「不動（明王）」、中央に「白大神」、その右に「鬼勸大神」と記された人物が描かれている。下1/2には、左上に「有子道」と記された裸の男女の頭と肩が描かれている。その下に、「大蛇道」と記され、人を口に咥え、しっぽで一人を絡めている姿が描かれている。その右側には、「大日」と記された赤鬼がその大蛇を指さしている。その大蛇の真下には、三匹の蛇に絡み締め付けられ、血を吐いている男性が描かれ、さらにその吐いた血を黒い三匹の蛇がなめ回しているといった、両婦地獄というより多婦地獄といった方が良いような恐ろしい地獄が描かれている。「他化獄」とその下書き込まれている。この蛇に巻き付かれ押し倒されている図像は、定型本熊野観心十界曼荼羅甲系統Ⅰ形式興善寺本の両婦地獄の図像を彷彿させるものである。その右側には、白骨化するまで犬（もしくは狼）に喰われる男性、その下には獣面化した男女が描かれ、「頸城愛」という文字が書き込まれている。さらにその下には、「骨碎獄」と記され、劫火に砕かれた骨をくべている鬼が両側に描かれている。右側の鬼には、「阿闍」と記されている。その上には、黒焦げの女性と両側に二人の赤子が描かれている。この部分を等活地獄のバリエーションと考えたとわかりやすかもしれない。左側の赤子の左隅に、文字の書き込みがあった痕跡を残すが、文字の左側半分以上が失われているので、判読困難である。

室町時代後期と制作年代を推定する宝幢院本地蔵十王図21幅のうち、特に熊野観心十界曼荼羅の老いの坂・両婦地獄・釘念仏部分の祖型を残しているのではと推定できる、人道第三幅、変成王幅、泰山王幅、都市王幅の4幅の分析を試みてみた。宝幢院本地蔵十王図には、六道絵あるいはそれと十王図が融合した六道十王図が、次の時代に熊野観心十界曼荼羅へと発展していく途中の過程を読み解き推定するには特に豊富なモチーフが含まれているのではないかと見られる。もしかすると、書き込まれている文字の読み違いや図像の解釈ミスも生じているかもしれないが、そこは他の研究者による次の研究発展へのバネとなれば幸いである。

## 謝辞

本研究においては、兵庫県立歴史博物館小栗栖健治先生並びに愛知教育大学鷹巣 純先生に貴重なご教示や調査同行の機会を賜りました。また、画像の掲載にあたっては梶取本山総持寺様、富山県[立山博物館]、宝幢院薬師寺様にはご許可を賜りましたことを記して、感謝申し上げます。

## 引用文献

- 萩原龍夫 1983 巫女と仏教史—熊野比丘尼の使命と展開— 吉川弘文館
- 宮川充司 2005 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (I)—「おいのさか」と生涯発達観— 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), 36, 45-55.
- 宮川充司 2007 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (III)—興善寺本と日本民藝館本の比較— 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), 38, 45-72.
- 宮川充司 2008 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (IV)—産屋の表現形態— 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), 39, 115-125.
- 宮川充司 2009 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (V)—「子は三界の首枷」考— 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), 40, 75-86.
- 宮川充司 2013 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (IX)—階層的クラスター分析による穀屋寺甲本の位置づけ— 椋山女学園大学研究論集 (人文科学篇), 44, 11-25.
- 根井 清 2003a 「地獄絵」の絵解き 国文学解釈と鑑賞, 68(6), 96-103.
- 根井 清 2003b 熊野比丘尼と絵解き 国文学解釈と鑑賞, 68(6), 163-172.
- 西山 克 2003 朝鮮甘露嶺と熊野観心十界図 国文学解釈と鑑賞, 68(6), 154-162.
- 小栗栖健治 2004 熊野観心十界曼荼羅の成立と展開 塵界 (兵庫県立歴史博物館紀要), 15, 129-242.
- 小栗栖健治 2011 熊野観心十界曼荼羅 岩田書院
- 滋賀県立安土城考古博物館 2010 湖西の風土と遺宝—高島郡を中心に— 滋賀県立安土城考古博物館
- 鷹巣 純 1996 六道十王図のコスモロジー 立川武蔵編 マンダラ宇宙論 法蔵館 pp. 271-303.
- 鷹巣 純 2000 和歌山・総持寺本六道十王図について 美学美術史研究論集 (名古屋大学文学部美学美術史研究室), 17-18 (合巻号), 66-85.
- 鷹巣 純 2012 近世の十王図・六道絵 (一) あま市七宝町徳実地区本十王図—十一人の十王—(上) 愛知教育大学研究報告, 61, (人文・社会科学編), 120-128.
- 東京国立博物館 2001 企画展「美術の中のこどもたち」東京国立博物館
- 富山県[立山博物館] 2001 地獄遊覧—地獄草子か立山曼荼羅まで— 富山県[立山博物館]開館10周年記念資料集
- 梅津次郎編 1980 地藏菩薩験記繪・矢田地蔵縁起繪・星光寺縁起繪 田中一松監修 新修日本絵巻物全集第29巻 角川書店
- 渡 浩一 2006 大和郡山市矢田寺蔵・新出「矢田地蔵毎月日記繪」について 明治大学教養論集, 404, 89-107.